



大府市は誰のもの

「新市都市ビジョン案」タウンミーティングに参加して

大塚裕昌（共西町）

ここ数年の間に、私たちを取り巻く環境は、大きく様変わりしています。世界情勢も経済も治安に関しても随分と変わりました。理由はいろいろあるでしょうが、私たちは、かつての日本という守られた船から、世界の大きな海原に投げ出されてしまった感じがします。

今年、大府市は市制35周年を迎えました。多くの人たちが、「大府市は住みやすい」という印象を持っているようです。大都市近郊にありながら自然も身近にあり、交通や医療にも大きな不便を感じない私たちは、幸せな35年間を過ごしてきたと思います。

そんな大府市も、今はこの海原の中にあります。地方自治法が改正され、これからは個々の地方自治体の在り方が問われる時代になってきました。地方自治をどう考えるか……。現在一般的に議論されているものとしては、「市町村合併によって総合的なコスト削減と投資余力の創出を図っていく」とか、

「地域で活躍する民間の能力を活用し、小さくても機能的な行政組織体にしていく」といったものがあります。

一方で、家族制度も変わり、交通や情報網が発達した今日、昔のように土地に縛られる時代ではなくなっています。私たちは住む場所を選びます。「今、住んでいる町のシステムが合わなければ違う町に移る」と



いう選択も可能な時代になってきました。でも、海原の中に投げ出されているという意味では、どの町も似たような状態におかれていると思います。

逆に、一番親しみを持っていて、気心の知れている町の中で、個人の可能性を考えていくという選択肢もあり、この方が、自分に合った暮らしやすさにつながっていくように思います。地域の中で個人の可能性を考えるというのは、これからの時代、重要なテーマになってくるでしょう。

海原の中にいる私たちにとって、そのストレスを和らげてくれるのは、日々の生活をしている地域です。安全や防災、子育て、介護といった問題を、孤立感を感じないように仲立ちをしてくれるのも地域です。また最近では、個人の能力を地域で活用し、自己実現に結びつけていく機会も増えつつあります。

現在大府市は、東海市、知多市、東浦町とともに「知多北部任意合併協議会」をつくり、合併の可能性に

ついて議論をしています。ボランティア参加者や学識者、行政職員よって提案された「新市都市ビジョン案」に、7月～8月に各地域の公民館で開かれた「タウンミーティング」の議論が加わり、「新市都市ビジョン」が制作されています。

このように、私たちは、地域や町の在り方に関して、重要な時期を迎えようとしています。私は、「新市都市ビジョン案」の発表会や「タウンミーティング」に参加して、個人と行政の関わり方が、これまでと違った形のものになっていく可能性のようなものも感じました。いろいろな考え方があってもいいが、こうした試みは、「賛成・反対」といったことは別に、「自分がどういう形で大府市と関わっていくのか」を考えてみる、いい機会を与えてくれるような気がします。

「未来は『そつたるもの』ではなく、『つむぎたるもの』であらいたい」フランスの哲学者アンリ・ベルグソンの言葉です。